

百万を越えるアメリカの核被曝者との連帯を——ネバダ核実験場を訪ねて

中山 高光

原爆の国アメリカを訪ねる
私は南米ペルーで生まれ、幼少のころ日本が中国に侵略をはじめたので日本に帰国し、十六歳のとき長崎造船所でアメリカの原爆投下に合い被爆しました。

原爆を投下したアメリカを一度は訪ねよう。そんな思いから被爆五十年の核兵器廃絶国連要請行動に、原水協や全労連代表と共に、被団協代表団の一員として渡米しました。その翌年に、アメリカ平和組織が企画した「核兵器廃絶二〇〇〇年被爆者ツアー」で再びアメリカを訪ねました。

しかし私が一番知りたかったアメリカの核被害の状況は、個々の話を聞くことはできませんでした。像はなかなか判りませんでした。それで昨年ネバダで開催された「地球の傷を癒す一九九七年春の集い」に参加し、三度目のアメリカ訪問をしました。初めてネバダ核実験場の地を踏み「この土地はわれわれのもの、核実験場に使う

約束はしていない、土地を返せ」と政府に迫る先住民の闘いに感動しました。アメリカにこんな闘いがあったのか。「核実験場閉鎖・核兵器廃絶」のデモにも参加し、未臨界核実験の資材運搬トラックの下に身を投げて阻止行動を闘う人々の姿にも接しました。沖縄の闘いと二重うつつになって目頭を熱くし、核実験場ゲート前で警備警官隊と向き合うと、「土地を返せ！核実験場閉鎖！核兵器なくせ！」と思わず拳を突き上げ、アメリカの友人たちが唱和し、「貴方は勇気ある人だ」と握手され互いに連帯を深めました。

アメリカ平和運動の底辺に先住民の土地返還要求があり核実験場閉鎖の闘いがあることを私はこれまで知りませんでした。アメリカの核兵器廃絶の闘いに大きな展望を見出す思いで勇気づけられました。核実験場を見下す山の中腹に在る被爆兵士慰霊碑の前で、被曝復員兵士連盟ガリスコ会長と「被

爆者兄弟」として核兵器廃絶のため助け合うことを誓い合いました。帰りの飛行機で「ワァーきれい白銀の翼に雲と波、反核のうねりアメリカを洗え」そんな歌を口づさんでみました。しかし、この時も核被害の全貌は判りませんでした。

米核被害調査団に参加して
原水協禁止世界大会実行委員会のアメリカ核被害調査団が派遣されることを知って「私も参加できるでしょうか」と伺い、四月十八日から三十日まで二週間のアメリカ核被害調査に加えていただき、再びネバダ核実験場を訪ねました。さらに風下地域を巡り核被曝者を訪ねて聞き取り活動にも参加することができました。

アメリカ政府の安全宣伝を信じて核実験の度に見物に出かけ、放射性降下物で汚染した山菜や野菜、果実、狩猟の獲物や家畜を食べ、ミルクを飲んでいたので。ウラン鉱採掘の労働者が危険を知らずに美しいウラン鉱石を家に飾り、子供たちが学校に持参して見せ合っ

ガンの多発や同じ年代の子供に白血病が集中するなどの異常に気づき、核実験の影響であることが判ってきたのです。今、被曝者は「政府にだまされた」「もう政府は信用しない」と怒っています。

広島・長崎の被爆から五十三年を経て、国籍を越え、同じアメリカ政府に謝罪を求めて核兵器廃絶を誓い合う、そんな調査団活動になりました。「行って良かった」。六才で白血病のため亡くなったベッサ・ユちゃんの墓に手を合わせ被団協つるバッチを捧げると、廻りは同年代の子供たちのプレートが幾つも並んでいます。緑が涙で潤みました。核実験に参加したのは兵士二十五万人と労働者二十五万人、風下地域の被曝者は十七万人の数字だけでもアメリカの核被害の大きさが判ります。国立ガン研究所はニューヨーク州など東海岸まで汚染の広がりを報告しています。アメリカの核被曝者は百万を超えるでしょう。被曝国日本と核大国アメリカの二つの国の被曝者が連帯し、この深刻な核被害の全貌を世界に伝えることは特別に重要だと思っています。
(熊本直前核被害者団体協議会事務局長)

「第五福竜丸」のうたを

歌手 橋本のぶよ

第五福竜丸展示館横の広場——この場所は、私にとって今まで一番多く歌って来た演奏場所でもあります。最近では船に向かって「又来たよ。」と話かける事が多くなりました。



「青い空は青いままで……」うたう橋本のぶよさん

第五福竜丸が私の生まれ故郷で作られたという事もあって、なかなかつかしきで、いっばいになるのです。船を見上げるたびに、いつも、ふるさと和歌山の海の色と潮のかおりを感じる事が出来ます。

そして、この春には、近くの海から引き揚げられたエンジンとの出会い、それを引き揚げた和歌山の杉さんとの出会いが重なり、第五福竜丸と自分を結びつける強い力を感じずにはいられません。

でもその一方で、核兵器を廃絶し平和を願う、たくさんの人々の力で保存された船とエンジンの歴史や運命、そして、その犠牲になった方々の事を思うと、船を見上げて、「なつかしきを感じる」などと言ってしまう自分の心の無さを反省せざるもいられません。「ノーモア」を叫びながら人類



杉さんの話を聞く三重県大台中学校の修学旅行

はどうして同じあやまちをくり返してしまおうのでしょうか。平和への願いを歌い続けて来た私にとっては、その生き証人である第五福竜丸の前で歌うという事はやはり特別な思いがあります。これまでも、いろんな団体の集まりに呼んで頂き、さまざまな立場や考えの人々と出会い、意見を交わし合い歌わせて頂きましたが、個々の立場や思想信条のちがいはあっても、この第五福竜丸に寄せる平和への願いは一つであり、いつも胸に響いて来るものがあります。特に平和行進の出発式などに若

い人がたくさん集まっているのを見ると、ほんとうに胸が熱くなります。そして、一年に何度もこの地で歌っていて最近、強く思う事は、広島や長崎をテーマにした歌はたくさんあるのに第五福竜丸を歌ったうたがないという事です。エンジンが展示される日までに、なんとか歌を創りたいのです。この船を思い、美しい海を思う——そんな歌を……先日、エンジンが沈んでいた三重の地から見学におとづれた中学生の皆さんの前で歌う機会がありました。ですが、皆さんの真剣なまなざしを体に受け、静まり返った展示館の中で、気持ちが一つになる瞬間を感じ取る事が出来ました。彼らが大人になって、この国を動かす頃には、核兵器廃絶を願うすべての人々が手をつなぎ合う、そんな時代を、むかえてほしい。そして、この地球上から核兵器をなくし、戦争のない平和な世界の中で、生きていってほしい——そんな思いをこめて、うたいました。これからも何度もおとづれ、歌い続けてゆくであろう夢の島・第五福竜丸、次に会う時は、あなた